

日本周辺国際魚類資源調査委託事業

山田浩且・久野正博・柴原浅行・谷水宗美・中村明菜・久保典敬・松尾剛平・岡本楠清

目的

太平洋を広く回遊するカツオ・マグロ類について、資源量評価やその動向予測、我が国周辺への来遊量の予測等を行うために必要な科学的情報を収集、整理することを目的に、(独法)水産総合研究センター国際水産資源研究所や各県水産試験場と連携して調査を行った。この中で、本県は県内所属船によるカツオ・マグロ類の漁獲状況や漁獲物の生物的特性に関する情報収集に当たった。

方法

1. 沿岸域における漁獲実態調査

県内におけるカツオ・マグロ類(クロマグロ、キハダ、メバチ、ビンナガ)の主要水揚港である和具、浜島、宿田曾、紀伊長島、尾鷲、奈屋浦の各港において、漁業種類別の水揚状況を調査した。さらに、浜島、贅浦、奈屋浦、尾鷲の各港においてはクロマグロを対象に漁獲物の魚体測定を行った。また、今年度から、クロマグロの加入動向を把握するために、曳縄標本船調査(GPS ロガーを用いた漁獲実態調査)を開始した。

2. 沖合、遠洋漁場における漁獲実態調査

沖合、遠洋域における中型、大型竿釣船の漁獲動向については、三重県漁労通信連合会および近海漁労通信会所属の標本船から「無線漁況連絡聴取簿(QRY 情報)」の提供を受け、カツオ・ビンナガ漁船の月別、旬別稼働隻数および漁獲量を緯度・経度毎に整理し、漁場の推移や漁況と海況の関連等について検討を行った。

結果および考察

収集した QRY 情報をもとに、本県所属船のカツオ・ビンナガ竿釣漁場の変遷を「平成 26 年における三重県中型・大型竿釣船のカツオ・ビンナガ漁況総括」としてとりまとめ、漁場探査の参考資料として関係漁業者に提供した。また、カツオ・マグロ類の漁獲動向、魚体測定調査結果については国際水産資源研究所に報告した。これらのデータは、太平洋におけるカツオ・マグロ類の資源量評価や日本周辺海域への来遊量予測の科学的根拠として活用された。資源評価や来遊量予測に関する結果の詳細については関連報文で報告されるので、ここでは本県所属船の 2014 年漁期におけるカツオ・マグロ類の漁況概要をとりまとめた。

1. カツオ漁況

1) 沿岸曳縄船

2014 年における三重県主要 4 港(和具・浜島・長島・尾鷲)の曳縄船によるカツオ水揚量は 49 トンで、前年(145 トン)の 34%、過去 10 年平均値(131 トン)の 37%と低い水準にとどまった(図 1)。例年、盛漁期となる春季(3~6 月)に顕著な不漁となり、同期(3~6 月)における主要 4 港の水揚量は 1 トンに満たない過去最低の水準となった。同期の CPUE(有漁船 1 隻当たりの水揚量)も近年になく低水準で推移した(図 2)。一方、10 月中旬以降、熊野灘沿岸で戻りガツオと思われる魚群の来遊があり、11 月中旬まで比較的まとまった水揚げがあった。主要 4 港における 10~11 月の水揚量は 47 トンで、同期としては漁獲統計の揃う 1999 年以降で 3 位の水準に達した。漁場は熊野灘沿岸一帯のごく沿岸域(10~15 マイル沖のごく沿岸)に形成された。同時期、熊野灘には黒潮北縁から短期的な暖水波及が繰り返しまいられていた。漁獲の主体は銘柄の中小(1.5~2kg)であった。

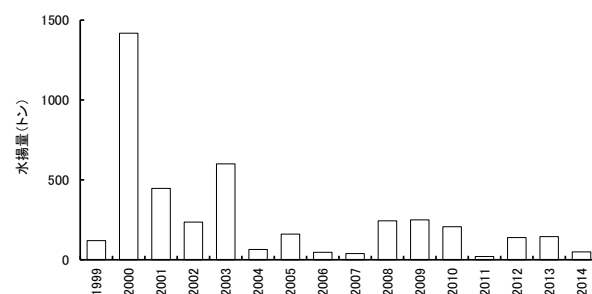


図 1. 沿岸曳縄船によるカツオ水揚量(主要 4 港)

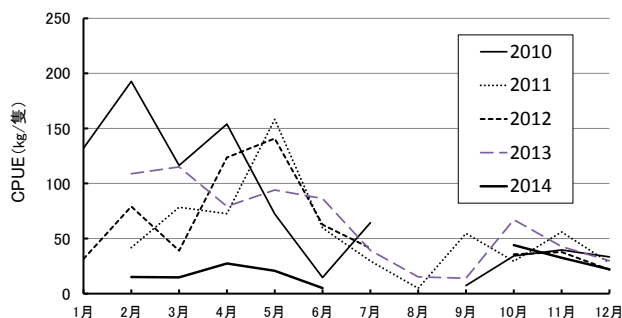


図 2. 沿岸曳縄船の CPUE の推移(主要 4 港)

2) 小型竿釣船 (19 トン以下)

2014 年における三重県主要 4 港 (和具, 浜島, 長島, 尾鷲) の小型竿釣船によるカツオ水揚量は 272 トンで, 好漁となった前年 (668 トン) の 41%, 過去 10 年平均値 (432 トン) の 63%にとどまったものの, 曳縄船ほどの極端な不漁にはならなかった (図 3)。盛漁期となる春季の CPUE も, 曳縄船ほどの顕著な低水準とはならなかった。熊野灘沿岸を主漁場とする曳縄船に比べ, 大型の小型竿釣船は操業エリアが広く, 静岡県沖~伊豆列島周辺海域まで操業に行く。曳縄船と異なる漁況を呈するのは, こうした機動力によるところが大きいと考えられる。一方, 小型竿釣船においても, 10 月に戻りカツオを対象として好漁となった。春季の漁獲対象は銘柄の中小 (1.5~2kg) 主体に, 中 (2~3kg) および小 (1~1.5kg) が混ざった。また, 秋季 (10 月) は曳縄同様, 銘柄の中小 (1.5~2kg) 主体に, 大 (2.5~4kg) および中 (2~3kg) が混ざった。

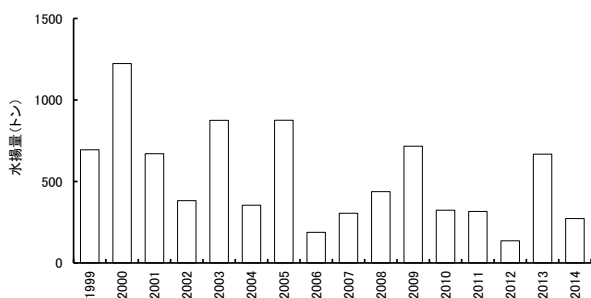


図 3. 小型竿釣船によるカツオ水揚量 (主要 4 港)

3) 中型竿釣船

QRY 情報に基づく 2014 年の三重県中型竿釣船 (9 隻) によるカツオ水揚量は 5,156 トンで, 前年 (7,873 トン) の 65%, 過去 10 年平均値 (8,985 トン) の 57%にとどまり, 漁獲統計が揃う 1987 年以降では最低の水準となった (図 4)。

漁場は 1 月下旬から前年よりやや南寄りの沖ノ島島周辺海域で形成された。2~4 月もほぼ同じ海域 (18~22°N, 135~141°E 付近) を中心に漁場が形成された。5 月上旬以降, 漁場の北上が顕著となり, スミス島~ハロース周辺 (30~32°N, 138~141°E) および黒潮前線域 (32~35°N, 143~146°E) に主漁場が移った。中南海域から近海, 黒潮前線域への漁場の北上は, 前年より約 1 ヶ月遅かった。6~7 月は黒潮前線域 (33~37°N, 142~155°E) を中心に, 東方沖合に漁場が広がった。8 月には 36~38°N, 146~155°E の海域にやや北上した。6~8 月の間は全般に低調な漁況となり, CPUE (有漁船による 1 日 1 隻当たり水揚量) も低い水準で推移した。9 月には

漁場が北上し (37~42°N, 146~155°E の海域), 同時に漁況が好転した。しかし, 好漁は持続せず, 10 月中旬には急に低調な漁況となり, 10 月末には全船が同海域での操業を打ち切った。例年に比べ, 漁期も短く終わった。漁獲サイズについては, 中南海域を主漁場とした 4 月までの漁獲物において, 特大 (4kg 以上) の割合が例年になく多かったのが特徴的であった。

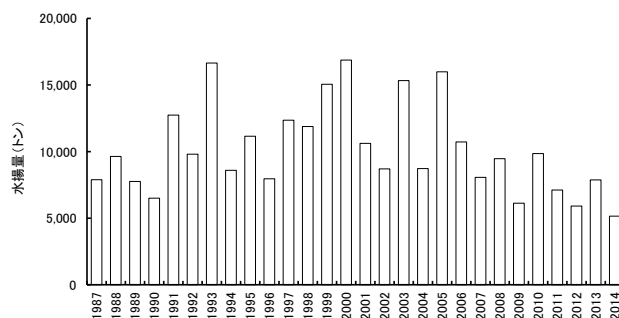


図 4. 三重県中型竿釣船によるカツオ水揚量

4) 大型竿釣船

QRY 情報に基づく 2014 年の三重県大型竿釣船によるカツオ水揚量は 9,107 トンで, 低調であった前年 (9,804 トン), 前々年 (9,683 トン) 並の水準にとどまり, 過去 10 年平均値 (15,180 トン) を大きく下回った (図 5)。

2006 年以降の水揚量の減少は, 三重県所属の大型竿釣船の隻数の大幅な減少 (2005 年: 20 隻, 2006 年: 12 隻) に起因するところが大きい, ここ数年は年間の CPUE (1 日 1 隻あたりの漁獲量) も低水準で推移しており, 来遊資源量そのものが減少している可能性が高い。

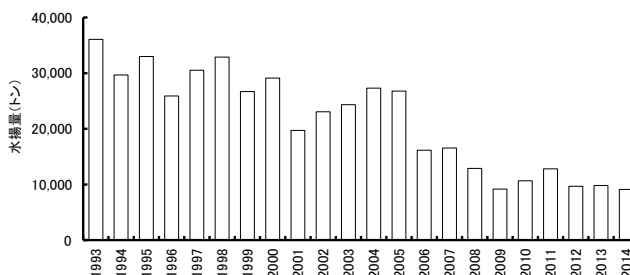


図 5. 三重県大型竿釣船によるカツオ水揚量

2. ビンナガ漁況

1) 中型竿釣船

2014 年の三重県中型竿釣船によるビンナガ水揚量は 3,832 トンで, 前年 (3,279 トン) の 117%, 過去 10 年平均値 (3,398 トン) の 113%となり, 低調であったカツオとは対照的に比較的良好な漁況で推移した (図 6)。た

だし、2014年における中型竿釣船によるカツオ、ビンナガの総水揚量は8,988トンとなり、カツオ不漁の影響を受け近年では最低の水準となった。

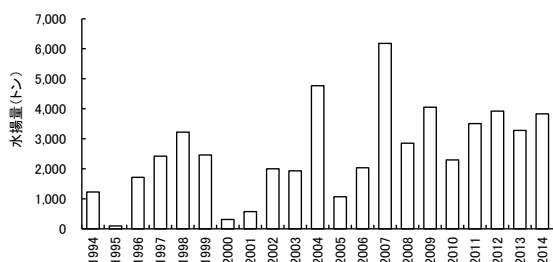


図6. 三重県中型竿釣船によるビンナガ水揚量

2) 大型竿釣船

QRY情報に基づく2014年の三重県大型竿釣船によるビンナガ水揚量は3,252トンで、前年(5,141トン)、過去10年平年値(4,824トン)の水準を大きく下回る低調な漁況となった(図7)。

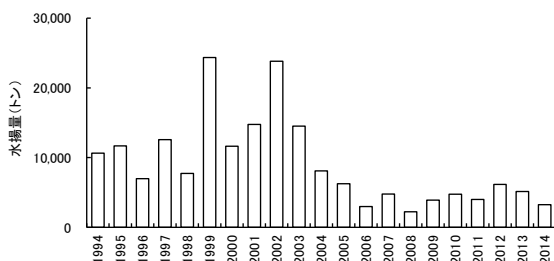


図7. 三重県大型竿釣船によるビンナガ水揚量

3. クロマグロ漁況

1) 漁業種別水揚げ状況

三重県内主要6港(和具, 浜島, 田曾浦, 奈屋浦, 紀伊長島, 尾鷲)における2014年のクロマグロ水揚量(全漁業種)は17トンで、前年並(18トン)の低い水準にとどまった。水揚げの主体となった漁業種別は、例年同様、定置網とまき網であり、それぞれクロマグロ総水揚量の62%、24%を占めた。次いで曳縄による水揚げ(8%)が多かった。定置網では5~6月および10月を中心に体重30~70kgの大型のクロマグロが、まき網では9~10月、曳縄では3月を中心に小型のヨコワが漁獲主体となった。

2) クロマグロ養殖用種苗(ヨコワ)の採捕状況

熊野灘沿岸域における2014年の養殖種苗用ヨコワ漁は極めて低調に推移した。初漁は前年より1週間遅い7月20日にみられ、8月末には終漁し、漁期は近年にない

短期間となった。三重県内における2014年漁期の総採捕尾数は約2,300尾で、2013年漁期(約24,300尾)の9%、2012年漁期(約19,000尾)の12%の低水準にとどまった(図8)。不漁のため出漁を見合わせ漁船も相次ぎ、努力量(出漁隻数)は大幅に減少した(モニタリングを行う主要漁協における有漁隻数は前年の13%にとどまる)。盛漁期となる夏季(8月)の漁獲主体は尾叉長28cm前後の個体群で、2012年および2013年の同期に比べてやや大きい傾向にあった(図9)。

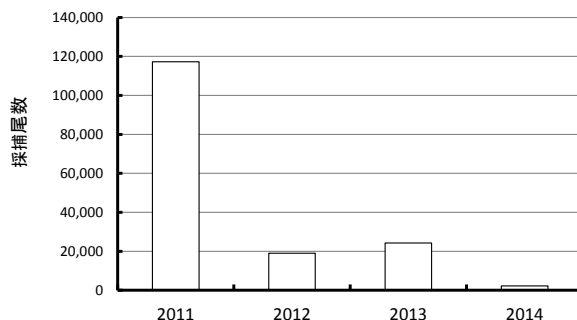


図8. 三重県におけるクロマグロ養殖用種苗(ヨコワ)採捕尾数の推移(2011年は届出制前の県任意把握数)

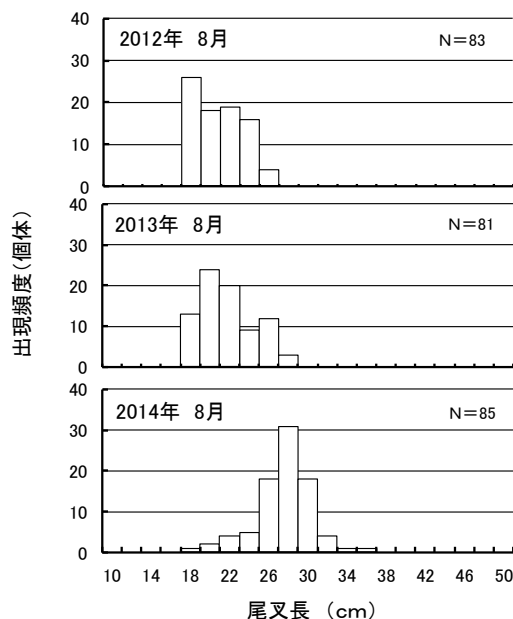


図9. 夏季(8月)に漁獲されたヨコワの体長組成

関連報文

平成26年度国際資源対策推進委託事業「日本周辺国際魚類資源調査」報告書、(独法)水産総合研究センター。

平成26年における三重県中型・大型竿釣船のカツオ・ビンナガ漁況総括、三重県水産研究所。